

〔その他〕

社会人学生を経験して－教員と大学院生の二足の草鞋

村上 慧（暁星中学・高等学校）

はじめに

私は 2018 年 11 月に行われた明治大学教育会研究大会の分科会において発表者を務めたことをきっかけとして、大学院での研究を強く希望するようになり、2020 年 4 月より青山学院大学大学院教育人間科学研究科（教育学専攻）に入学し、いわゆる「社会人学生」としての生活を送った。この選択にあたって、同じような経験をした先輩教員の事例を探したが、教育委員会からの派遣などで研究に専念していたケースが多く、フルタイムで教員として働きながら大学院に通うことはまだまだ「特殊」であることを実感した。そのため本稿では、同じように研究に関心を持つ方の助けに少しでもなればという思いから、そこに至るまでの過程を紹介するとともに、教職と研究を同時に経験する中で感じたことを書き連ねる。

1. 学部時代の大学院への憧れと就職後に抱いた問題関心

私は文学部の地理学専攻出身だが、大学入学時から卒業後の進路として教員を強く志していた一方、学部 1・2 年生の段階では、大学院への進学も検討していた。しかし、「最終的に教員を目指しているのであれば、進学よりも 1 年でも早く現場に立った方が良いのではないか」といった考えのほか、文系学生の大学院進学に対するネガティブな情報に弱気になったこともあり、結局、進学はせずに就職を選択した。それでも、大学院への未練はかなり残っており、指導教官であった川口太郎先生に卒業式後の謝恩会でその思いを吐露したところ、「大学院は『これ』という問題関心がないと上手くないよ」と言われた。ゼミの共同研究や卒業論文作成の際の文献調査・インタビュー調査で研究の楽しさは実感していたものの、卒業論文のテーマ設定でもかなり苦労した私は、「●●に関する地理学的な研究をしたい！」という強い思いがあったわけではなかった。それらを踏まえて、「強い学問的関心が見つかった際は改めて大学院に入学しよう」と大学卒業時に決意し、大学院への可能性を探り続けることにした。

こうして 2015 年に、地元である北海道の公立中学校で勤務が始まったものの、それと同じタイミングで、前年度の体罰を理由として同僚教員が停職処分を受けた。当時の勤務校は、校内暴力や対教師暴力が頻発し、家庭裁判所や警察の介入も多いなど、生徒指導困難校であったため、「そうした指導もやむを得ない」という意見が同僚や生徒からも聞かれた。このように様々な立場から体罰の是非論を耳にする中で、それまで体罰を遠い世界の話に感じていた私は、初任教員の課題とされる「リアリティ・ショック」を早々に経験することとなった。特に感じたのは、なぜ「是」とする意見が出てくるのか、という疑問であり、さらに言えば、同じ行為を見聞きした（受けた）人々の中でなぜ「是」と「非」という対極的な意味づけが生じるのか、ということの頭の中で整理できなかった。

そこから、体罰や不適切な指導という、いわゆる「学校病理」について漠然とした関心を有し続けることとなった。特に、2校目の勤務時に過去の体罰経験を嬉々として語る先輩教員と出会ったこと、あるいは体罰の目撃経験を有する真面目な生徒（教員志望）が強い口調で体罰の正当性を主張したことなどを通じ、体罰や不適切な指導は身近な現象であること、それらに対する価値判断が多様であることを強く実感し、それが「これをきちんと研究してみたい」という気持ちをさらに高めたように感じる。大学院派遣研修を経験した明大の先輩にお話をうかがうなど、自分が進学するとすればどのような形になるのか、少しずつ情報を集めるようになったのも社会人2年目からであったと記憶している。

2. 明治大学教育会と進学準備

こうした自分の問題関心を何らかの形にしてみたいという思いが募り、学生時代からたびたび参加していた明治大学教育会の研究大会で発表させていただけることになったのが2018年11月である¹。発表準備として体罰に関する書籍や先行研究をレビューしていく中で、様々な量的調査が示す被体罰経験が体罰の容認に与える影響、体罰の意識に関する社会調査の結果、あるいは体罰が身体的発達に与える悪影響などに触れ、様々な分野から体罰研究が行われていることを知った。この過程は自分の問題関心を絞り込むことにもつながり、それがのちに大学院に出願する際の研究計画書作成の大きな助けとなったとも感じている。何より、研究大会を経て、研究意欲がより高まったことが最大の収穫であった。

研究は大学院に入学しなくても可能であるという意見もいただいたものの、教育学の門外漢である私は、学問的作法から学ぶ必要があると感じたほか、質的研究を行うならば大学院の学生であること（研究機関への所属があること）が1つの信用になるのではないかと考え、研究大会の翌月には大学院進学の意味を固めた。先の先行研究の著者を中心に、教育学や体育学を専門とする先生方に連絡をとり、実際にいくつかの大学を訪れて相談を重ねた。その際、多くの先生から「どういった領域からのアプローチを試みるのかを整理すれば、進学先がある程度絞られてくるのではないか」というアドバイスをいただいた。実際、体罰研究は教育心理学、教育哲学、教育行政学、教育社会学、体育教育学、コーチング学など様々な分野において行われている。ただ、教育学がどのような領域に分かれているのかもよく知らなかった私は、まずはこうした領域がどのような分野なのかを調べることから始まった。また、在学中にも大変お世話になった教職課程の伊藤直樹先生や川口先生からは、他の院生の存在が研究には重要であることを教えていただいたとともに、スタッフが多い大学院を選ぶことを勧められた。

首都圏で教育学部がある大学・大学院はそう多くはなく（文学部や人間科学部などの中に設置された教育学専攻の場合、教員数が少ないことで自分が希望する学問領域の教員がない場合もある）、なおかつ教員養成系ではない大学はかなり数が限られる。また進学に当たって退職や休職は全く考えていなかったため、働きながら通える首都圏の大学院を検討

¹ 村上慧・関秀隆（2019）「若手教員が考える「なぜ体罰はなくなるのか」」『明治大学教育会紀要』11,pp.41-47.

したものの、休職による研究専念義務が求められるなどフルタイムとの両立が困難である大学院も珍しくなかった（早稲田大学など）。結果、青山学院大学がこれらの条件を満たす大学院であることが分かり、2019年10月に社会人入試を受験した。試験は教育に関する小論文と論文和訳及び面接で、高校生以来まともに英語に触れていなかった私は論文和訳にかなり苦労したものの、英語科の同僚教員に添削をお願いし、対策を行った（社会人が大学院入試を受ける場合、英語がネックになる場合が多いと後から何度か耳にした）。

私の場合は「自宅・職場から通える範囲内」「スタッフが多い大学」「休職せずに通学可能」「教育社会学を専門とする教授が在籍する大学・専攻」といった条件で進学先を検討したが、それに合致する大学が青山学院大学以外に見つけられなかったため、他大学の受験はしなかった。なお、首都圏の教員養成系の大学（東京学芸大学・横浜国立大学・千葉大学・埼玉大学）では、現職教員向けに3～4年かけて修士課程修了を目指すプログラムが設置されている（学費は2年間分）。現職教員で進学を希望する場合、仕事と通学の両立の可否、スタッフと自分の希望する研究内容との比較など、これらの大学院を一度検討してみると良いのではないだろうか。ただし、以上の情報はいずれも私が大学院入学を検討した段階のものであり状況が現在とは異なる可能性があるとともに、国立大学の教員養成系の修士課程は原則として教職大学院への移行が進められているので注意が必要である。

3. 新型コロナウイルスによる影響

2020年4月に青山学院大学に入学したものの、新型コロナウイルスによる影響で、授業形態はオンラインとなった。大学院の先生方や、他の院生と直接顔を合わせて話す機会がなくなったことでマイナス面も多かったが（特に大学院生の研究生活がどのようなものか、他の院生の姿からイメージを掴むことができなくなったほか、議論を交わす中で自分の研究のブラッシュアップをする、という過程が全くなかった）、働きながら大学院に通ううえではプラスの面も少なくなかった。当初の予定では、平日は終業後に大学に移動して夜間の授業に参加することになっていたが、オンラインになったことで通学がなくなり、身体的負担が軽減されたことは非常に大きかった。また、非リアルタイム型の授業に変更になったものもいくつかあったため、勤務や他の授業との時間調整が行いやすくなった。

2年生になった2021年度も新型コロナウイルスの影響で原則オンラインという状況が続いたため、結局授業や研究指導を対面で受ける機会はほぼなく、実際に登校した回数は2年間で20回もないほどだったと思う。その点は、大学院を経験された方であれば様々なご意見を持つかもしれないし、すでに書いた通り損失も多かったと思う。私自身も、当初思い描いていた生活と大きく異なった2年間であったのは事実だが、社会人学生としてはむしろ享受したことも多かったと感じている。

4. 大学院から教育学を専攻して感じたこと

入学当初、教育学の文献を読んでいく中で教育学独得の言い回しや表現の多さにまず戸惑いを感じた。また、国内外の重要な教育学説や教育学者についての知識もほとんどなかつ

たため、特に教育哲学や教育思想史の文献を読むのにはかなり苦勞し、研究指導以外の授業の予習・復習に多くの時間を割くことになった。

さて、戦後教育学において、理論と実践の二項対立が長らく課題とされてきた。そこで、理論と実践の往還を目指す目的が付与され設置されたのが教職大学院（専門職大学院）であるが、私は理論を学んでそれを現場の実践に還元するというより、教育学の研究を行いたいという思いから教職大学院を選択しなかった。そのため、大学院で理論を学ぶことや、教育に関する研究をすることが、日々の勤務（学校現場での実践）とはあまり結びつかないのではないかと考えていた。しかし入学してすぐにその考えは変わり、大学院で触れる理論と学校現場の実践を切り離して考えることは不可能ではないかを感じるようになった。とはいっても、大学院で学んだ何か自分が自分に直接的に作用したという実感はなく、例えば先の教育哲学で言えばフーコーの『監獄の誕生』を読んだことが自分に変化をもたらしたとは思わない。しかし、教員の働きかけが個々人を取り巻く様々な要素の総体であることを踏まえると、大学院で学んだ理論、あるいは「学んだこと」「研究したこと」そのものが自分の考え方や実践に何らかの影響を与えているのではないかと感じる。つまり、実践力を身につけるための進学ではなかったが、教職と大学院での研究を掛け持ちしたことが日々の取り組みや生徒との関係、自分の考えに影響しなかった「はずがない」と今は強く思う。

また、論文や学会を通して各地の大学の先生方や大学院生の存在を知っていく中で、現職教員で大学院に在籍して研究を行っている（いた）方が、自分が思っていたほど珍しくないことができて、大きな励みになった。私が在学していた中学校にもフルタイムで勤務する傍ら大学院で研究をしていた先生がおられたほか、先述した文学部の先輩は本人の強い希望で大学院派遣研修を利用した（なおこの方は研修で修士号を取得した後、博士後期課程に進学した）。これらから感じたのは、大学院での研究に関心を持っている教員は意外と多いのではないかと、ということである（紙幅の都合で割愛するが、教師教育学ではこの点についての調査・研究も行われており、潜在的ニーズの大きさが指摘されている）。ただしそれを実際に行動に移すには、通学可能な範囲における大学院の存在（地域間の教育格差）、勤務日・勤務時間との兼ね合いなど、個人で対処できない様々なハードルがあるのも事実であり、そうした難しさが「学び直し」を妨げている大きな要因と言えるだろう。

5. 社会人学生の事情～強みと弱み

すでに書いた通り、学部時代も大学院への進学を検討していたが、それは何となく「研究が面白そう」と感じたからで、しっかりとした問題関心を有していたわけではなかった。それが明確になってから大学院に入学できたことで、多少行き詰った時でも研究に面白さ・楽しさを感じ続けることができた。加えて、問題関心が日々の勤務から生じたものであり、「現場の目線」からの考察もできたこと、調査対象者と背景知を共有できたことは、いずれも現職教員だからこそその強みだったと感じる。また、学校は閉鎖性の強い環境であり、なかなか自身の状況・環境を客観的に（相対化して）捉える機会が少ない。入学した直後、教授から「大学院に在籍したことで、今後の教職生活での学校に対する見方が変わると思う」と言わ

れたことがあったが、こうして別な所属を得て、学校現場を新たな視点から眺めることができたのは、自分に間違いなく良い影響を与えたと感じている。大学院に入学したころは、少しずつ経験を積み重ねてきた中で日々の勤務や実践に対する閉塞感が大きくなっていった。大学院に籍を置き、自分自身が改めて「学び手」となったことで精神的な充足感も大いに得ることができたのは本当に大きかった（誤解を恐れずに言えば、大学院の存在は自分にとって本当に良い気分転換となった）。

学費や生活費といった金銭的な心配がなかった点も無視できないだろう。進学を検討する段階で、教育系に限らず休職・退職して大学・大学院に入学した方の話を聞いて、到底自分には真似できないと判断した。また、博士後期課程や博士研究員（ポスドク）の方と話す中で、「正規雇用なら絶対にそのまま働き続けて研究した方が良い」と言われたことも何度かあった。アカデミックキャリアのポストの少なさ、任期付き採用の多さは社会問題となって久しいが、研究面以外の不安（収入・就職など）を感じることなく研究できることは、間違いなく社会人学生の大きな強みだろう。

ただし、時間の確保は想像を絶するほど大変で、大学院の何人もの先生方に「2年で修了するんだよ」と発破をかけられる日々だった。平日の夕方から夜間にオンラインで授業を受け、週末はひたすら課題に取り組む日々で、研究に割く時間はほとんどなかった（勤務校の長期休業中以外、研究は通勤時間に論文を小間切れに読む程度しかできなかった）。仕事と大学院のバランスは、入学前に思い描いていたものとは程遠い状態で、そこは常にもどかしさと焦りを感じ続けていた点であり、研究に専念できる大学院の同級生をかなり羨ましく思っていたのも事実である。

また自分では認識していなかった点だが、「社会人学生は、まず研究の思考回路に切り替える必要があるからその点ではドクターよりマスターの方が大変かもしれない」という話を学会の懇親会で聞く機会があった。それを受けて入学以降の生活を振り返ってみると、確かに初期は文献を読むのも、レポートを書くのも、発表準備をするのもかなり時間がかかっていたほか、研究をどのように進めていけば良いのか全くイメージが掴めていなかった。私の場合、研究の思考回路に切り替わったのはM2の7月ごろで、相当遅かったと思う（遅すぎるくらいだろう）。そのように研究の方向性が見えてきたことでデータ分析や修士論文執筆が本格化する一方で、この時期は博士後期課程の出願準備も始まり、とにかく時間に追われる日々で、元来自分は複数の課題を同時にこなす器用さを持ち合わせていなかったことも相まって、本当に苦労した（それまでは夜間や休日に自宅で仕事をするのが当たり前だったが、その時間を最小限に減らした）。秋には本文の作成に目途をつける、といった「模範的」な修士論文作成スケジュールと自分の状況を比べて、かなり焦りを感じながら生活しており、精神的にも大変な時期だった。

6. 学び直しや掛け持ちは「特殊」なのか—改めて「社会人学生」のススメ

文部科学省「学校基本調査」によると、大学院生に占める社会人の割合の上昇傾向は続いているものの、成長率は鈍化している。またこうした社会人の進学も、専門職大学院や理工

系の大学院と比べて、人文科学や社会科学系の進学の方が珍しいことは否めない。私の大学院進学に対する周囲の反応も、「自分はそんなことを考えたこともない」というようなものが多かったという印象で、大学院の同級生からは「専修免許を取るために大学院に来たんですよね?」と言われたこともあった。やはり社会人が大学院で学ぶことは実務との直接的な関連性で捉えられることが一般的であり、「学びたい」「関心がある」という動機から行動を起こすことはまだまだ理解されにくいように感じる。

しかし私自身の学部生時代を振り返ってみると、社会人学生の学友は、向学心に溢れ、知的好奇心を満たすことの楽しさを体現しているような方々ばかりであったように思う。本来は当たり前のことであるが、自分の「学びたい」という強い気持ちがあれば年齢やキャリアは全く関係なく、それを思う存分実現できる場所、安心して飛び込んでいける場所が大学・大学院なのだ、こうして自分が社会人学生を経験して強く実感した。また、大学・大学院で出会う方々は多様性に富んでおり、それ自体が刺激的な学びの場であるとも感じた。コロナ禍の大学のオンライン化によって学生の機会喪失が叫ばれたが、確かに大学は高等教育機関としての役割とはまた異なる、インフォーマルな「学びの場」としての機能を有しているのだと思う。博士前期課程の2年間、ゆっくり休む時間、プライベートに使うまとまった時間はほとんど取れなかったが、それ以上の充実感があったのは間違いない。

ただし、前述したように、仕事と学業の両立が非常に大変であることも疑いようのない点で、事情によってはフルタイムの勤務との掛け持ちは困難である場合もあると思う。しかし、リカレント教育の重要性が叫ばれている今日、社会人に向けて高等教育の門戸は広げられており、入試内容や通学形態、授業時間など、そのあり方はかなり多様である。どのような形態があるのかを調べていく中で、今の自分でも実現し得る方法が見えてくるのではないかと思う。また私の場合は、分野が違う方も含めて、社会人学生を経験した方のブログ等を拝見することでイメージが膨らみ、「自分にもできるのではないか」と思うようになった。入学後も、「どんなに少ない時間でも、研究に全く触れない日を作らない」というように、仕事と大学院の両立に関するヒントを得たのもこうした経験談からである。何より、このように社会人学生やその経験者が意外と身近であると気づけたことで、社会人になっても「学びたい」という気持ちを行動に移すことが決して「特殊」ではないと思うようになった。

教員はその職務の性質上、学び続けることが強く求められる職業である。そのため、こうした「学び直し」に最も近い立場であるはずだが、残念ながらまだまだ一般的とは言いがたい。その背景は、教員の多忙化や理論と実践の乖離など様々な要因が考えられる。しかし、教員が持つ実践知をもとにした臨床的研究が活発になれば、そこから得られた知見は最終的に現場に還元され、学校現場が抱える課題の軽減に寄与するのではないだろうか。教育学の研究において、現場の教員が持つ問題意識や感覚などへの関心が高まっているのは間違いない。普段の勤務で「何となく」感じていることが大きな研究テーマになり得るのであり、実際にその「気づき」や「違和感」を探究する仲間が増えてほしいと願うばかりである。

なお、私の調査・研究にあたっては、地理学専攻の大先輩の先生方、付属校の先生方、教職課程の友人たちなど、多くの明治大学関係者にご協力いただいた。この場を借りて、改め

て深謝の意を表す。また、以上の経験は私の個人的な事例に過ぎず、決して一般化できるわけではない。しかし、本稿が読者の方の「学び直し」に少しでも寄与すれば望外の喜びであり、研究と教職を両立する教員が増えることを願ってやまない。